

監督 BAR

ここは監督たちが集うバー。ふと立ち寄った彼らがグラス片手に語るのは、人生を変えた思い出の1作…。今回は高橋伴明監督が、新作映画を通して考えた「死に方」について語る。

Photo/蓮尾美智子 Text/前田隆弘

延命治療に振り回されるだけの死でいいのだろうか

医学の進歩に伴って、延命治療が可能となった現代。そこにはかつてあった「自然死」はもはや存在しない。しかしそれで本当にいいのだろうか。今の私たちにとって「死に方」とは、進歩していく延命技術に振り回されるだけのものになっていないか。死は当事者一人ひとりの判断に委ねられるべきであり、そこには自由があってもいいのではないか。そんなテーマを問いかけてベストセラーになった長尾和宏の「痛くない死に方」「痛い在宅医」を、高橋伴明監督が映画化したのが「痛くない死に方」だ。高橋監督自身、映画を撮る前から関心があったテーマなのだという。



今夜のスペシャル



冒険者たち

監 口ベール・アンリコ

パイロットのマヌーとレーサーのローランの前に現れた彫刻家のレティシア。やがて3人はアフリカの海底に眠る財宝の話聞き、コンゴへと旅立つ。

「65歳を過ぎたあたりから、『どう死のうか』を考えるようになったんです。そのときは漠然と『延命治療は嫌だな』と思っていて、いろいろ資料を読んでいるうちに在宅医の存在を知りました。ちょうどそんなときに、この映画の話が来たんですね」

序盤、末期の肺がん患者（下元史朗）が登場する。彼は痛みを伴いながら延命治療を続ける入院ではなく、“痛くない在宅医”を選択。その担当医となった河田（柄本佑）は、経験の浅さゆえ満足なケアができず、患者はかえって苦しみながら死んでしまう。その経験が河田を大きく成長させるきっかけになるのだが、患者の苦しみ方にすさまじいリアリティがあった。映画での死はいくつも見てきたが、ここまでリアリティのある死は初めてだったかもしれない。

「あの場面は、原作の長尾さんが現場にいて、実際の呼吸の仕方など細かく指導を受けながら撮りました。だから医学的に見てリアルな場面になっているわけですが、逆にそのことで悩みました。『ここまで見せて大丈夫だろうか。お客さんは嫌がらないだろうか』と思って。でもあの場面をきちんと描かないとラストまで持っていけないという気がして、ちゃんと入れることにしました。患者役の下元とは長い付き合いなんですけど、彼はよく演じてくれたと思う。紙おむつで演技をするのは相当抵抗があったと思うけど、迫真

の演技だった」

後半、河田が担当するのが同じく末期の肺がん患者である本多（宇崎竜童）。妻・しぐれ（大谷直子）との夫婦の掛け合いを見ていると、死が迫っているのに「とても幸福な人生を送っている」と感じる。人間の死に様として、憧れを覚えるほどだ。

「宇崎さんとは何度か仕事しているけど、直子とは何度も一緒に酒を飲んでいたのに、仕事をするのは今回が初めてだったんです。でも彼女は最初、『自分にこの役ができるのか不安だ』と泣いてたんですよ。だから会って話をしたんです。『今やっておかないと、1回も僕と仕事しないまま、人生が終わってしまうかもしれないよ』って。彼女自身、過去に悪性リンパ腫を患っていましたから。だから引き受けてくれて、本当に良かったと思う」

よく混同されがちだが、安楽死と尊厳死は似て非なるものだ。患者本人の意思に基づき致死性の薬物で死に至るのが安楽死。尊厳死は、苦しみを伴う延命治療をせずに平穏な死を迎えようとするものだ。その意思表示のために書く文書がリビング・ウィル（尊厳死を希望する文書）。もちろん映画にも登場する。「実は映画を撮る前に、尊厳死協会に入ったんです。リビング・ウィルは原作にも書かれているものなんですけど、僕の考えとも一致するので、映画でも1つのメッセージのような思いで入れました」

高橋伴明

BANMEI TAKAHASHI

映画監督



'49年、奈良県生まれ。
'72年「婦女暴行脱走犯」で監督デビュー。
若松プロダクションに参加し、数々のピンク映画を監督。
'82年の「TATTOO〈刺青〉あり」でヨコハマ映画祭・監督賞を受賞。
'94年の「愛の新世界」ではおおさか映画祭・監督賞受賞。
近作に「道〜白磁の人〜」（'12年）、「赤い玉」（'15年）など。

観客という立場で見ているうちに「あなたはどうか死にたいですか?」と問いかけられ、当事者として考えさせられる映画だ。

そんな高橋監督が強く影響を受けた映画は、アラン・ドロン主演の「冒険者たち」。男女3人が財宝を探しに旅立つ、ちょっぴり切ない冒険映画だ。

「学生時代に見たと思うんだけど、三角関係あり、冒険あり、男同士の関係もありという、僕にとって映画のベースとなる要素が全部詰まった作品です。どんな映画でも、観るときは普通の観客として楽しんで観ているんですけど、それでもこの作品は自分の中での1つのお手本として記憶されている映画ですね」

NEW MOVIE

痛くない死に方

2月20日(日)より全国公開

監 高橋伴明

原 長尾和宏「痛くない死に方」(ブクマン社)

脚 柄本佑 坂井真紀

余貴美子 大谷直子

宇崎竜童 奥田瑛二

在宅医の河田は、末期の肺がん患者・敏夫の担当に。娘の智美の意向で延命治療をやめ「痛くない在宅医」を選択したはずが、敏夫は苦しんだ末に亡くなる。智美は河田を責めるが…。



©「痛くない死に方」製作委員会